

添牙いるは

Soekiba Iroha

イラスト：ターヤ

忍者  
と裸の



仲間達

DOJIN  
R18  
成人向け

18歳未満の  
購入・閲覧禁止



大学の入学式を終えて、新入生たちがゾロゾロとホールから出てくる。皆一様に制服のようなスーツを着ているので誰が誰だか判りにくい。だからか、逆に彼女の方が先に僕を見つけてくれたようだ。

初めて見るキリリとした正装は新鮮だが……やはり着心地は良くないらしい。足を速めるも膝の動きがぎこちなく、すぐにでも脱皮したがつているようだ。

なので、僕はすかさず彼女を労う。

「お疲れ様」

とでも言つてあげないと、隙を見つけて登校初日からやらかしてしまいそうなほど、彼女は不機嫌だ。

「はい、本当に疲れてますよ……」

「か……帰るまで我慢な」

誤魔化すように頭を撫でてやると、フニフニと嬉しそうに目を細める。一先ずこの場は何とかなりそうだ。このままありとあらゆる手段で気を紛らわせてやろう。

「とりあえず、昼飯でも食わないか？」

新入生には午後から何やらガイダンスがあるらしいので、まだ帰ることはできない。僕も二年前にそういうのがあったような気がするのだが……もう忘れた。

家はそう遠くもないので食事のために一旦帰ってもいいのだが、いい機会なので学

校の施設に慣れておくのも良いだろう。人は大いに賑わっているが、学食にも色々ある。こういうときは、厚生棟の上の方にあるちよつと高めのレストランチェーン大学支店が良いだろう。入学したてのユたちには、あのシックな雰囲気は入り難いだろうから。

豪華な昼食を前にして、彼女は元気をすっかり取り戻している。ちよつとしたお祝いが楽しみ——なのかと思ったが、それだけではないらしい。

「学校でのお昼ご飯って高校生活を思い出しますねっ」

高校生活……か。たった三年前の話ではあるが、とても懐かしい気がする。当時高校生だった僕は、下級生だった彼女と、そして——

「そうね。こうして三人で食べていたわね。貴女、一人だけ学年が違うのに押し付けてきて」

ふむ、丁度昼食時が重なったようだ。そういえば、転入生のガイダンスも今日だったか。それで、午後合わせて登校してきたのだろう。

後ろを振り向くと、その先にはスウェットにショートパンツ姿の同級生・鷹池たかいはだし裸足が立っていた。元々併設された専門学校の方の二年生だったが、編入試験を経て三年目からは大学に通うことになっている。といつても、彼女の實力を考えれば大学入試に失敗したことの方がおかしい。順当にいけば、ここより一つ二つ上のレベルを狙う

べき成績は残していたのだから。

彼女の言うとおり、僕と鷹池……そして、きの子こと埋竹まいたけい礼菜は高校時代同じ部活に所属しており、同席で箸を突く仲だった。礼菜だけ学年が二つ下だったため、僕と鷹池は先に卒業してしまっただが、その交友は――

「こんなところでナニしてるんですか！ お仕事は!!」

「学生の仕事は学問でしょ？」

……まったくなかったらしい。卒業間際、彼女たちは少し揉めていたが……完全に連絡を断つほどだったとは。

「何アホヅラ晒してるの。こーちゃんから聞いてなかったの？」

相変わらず辛辣な物言いだが、礼菜が食い付いたのはそこではなかった。

「いま、『こーちゃん』って呼びませんでした!？」

呼んだな。礼菜が異様に驚いたことで、僕もちよつと前まで苗字で呼び捨てにされていたことを思い出す。が、それはあくまで高校に入ってからの話だ。鷹池と過ごした中学生生活ではこのように呼ばれていたし、それが昨年の夏の一件で戻っただけのこと。僕としては、穏やかな鷹池が帰ってきてくれたようで、少し嬉しい。

「もう、誰かさんの趣味に合わせて知的キャラを演じるのも疲れちゃってねー」

ふわりと僕の肩に短い横髪を乗せてくる。そういえば、高校時代は長髪だったから

……ショートの鷹池を見るのも初めてなのかもしれない。

初めてづくしで混乱している礼菜に、軽く説明しておこう。

「高校卒業した途端、素の鷹池に戻ったみたいだな」

完全にこの状態になったのは半年ほど前だが、そのキツカケとなったのは僕が入学するよりもさらに前。大学に通うための引越準備中にやってきた鷹池は……既にその片鱗を見せていた。何故こうなってしまったか……それは、礼菜の前では口が裂けても言えない。

「これが素なのか知りませんが、もう中学生じゃないですし、あたしのコースケ先輩にそういうことするのやめてもらえませんか!!」

それを聞いて、僕の胸がドキリと軋む。鷹池はまだ僕のことを諦めていない。これまでは学校が離れていたから良かったものの、このふたりが居合わせてしまったら……どうなってしまうんだ……!!

僕たちの間に身体を差し込み、ギューと左腕にしがみついて礼菜は鷹池を威嚇している。が、睨まれた方は相変わらず平然としたままだ。

「独占欲の強いオンナは嫌われるわよー。こーちゃん、このコに疲れたなら相談に乗るからいつでもいらっしやい」

「何の相談ですか!」

この鷹池は……どうしたのか……。高校時代の委員長の仮面を被った鷹池と違い、今のふたりは至極相性が悪い。

「ほらほら、私にもガイドダンスがあるんだから、早くご飯にしないと。入学祝いに奢ったげるわよ。こーちゃんには、昨日の夜のお礼もあるし♪」

と意味深にウインクを飛ばしてくる。たかだか課題の手伝いで何故そんなに挑発するような言い回しを!!

ヤキモキしている僕の気も知らずに、鷹池はさらに事態を悪化させてくる。

「そのコが帰ったら、昨夜の続きをしましょう？ ふたりきりで、ね♪」

「課題の続きだよな!!」

そのあととしてたことについて、ここで触れるのはご法度だぞ!

こんな言い回しでは、礼菜に安心できる要素は一つもない。再会早々、完全に嫌疑の目を向けられてしまった。

「あたしもコースケ先輩にご一緒させてもらいますからね!!」

プログラミングから離れて久しい彼女が、鷹池の課題に助力できることなど何もない。明らかに監視である。

かつては上手くやっていたのだから何とかなるだろう、というのは甘かった。正面からいがみ合っているふたりの間を僕は取り持っていけるのだろうか……? ?



# 忍者と裸の仲間達

添牙いろは

帰るまで我慢、という札菜との約束は、既に反故にされている。とはいえ、鷹池との再会によって極限まで苛立たせてしまった彼女を宥めるにはこうでもしないと収まらない。

堅苦しいスーツを脱ぎ去ることで少しは気分も晴れるだろうと期待していたが、まだまだ手緩いようだ。

「……貴女たち、入学早々退学になるつもり？」

今日の「課題」に他意はないため、鷹池は普段は重いと言って持ち歩かないノートパソコンを持参している。なお、他意のある課題については、ここでは触れない。

場所はいつもどおりの図書館棟。しかし、僕らの他に学生はいない。何しろ、大学の授業は来週からである。それまでは貸出業務も行われておらず、事実上自習室と変わらない。ゆえに、少々ハメを外しても周囲に鼻を摘まれることはないといえ……これはなあ。

「スーツを脱いだら退学ですか。へー、随分罰則の厳しい大学なんですねぇ？」

鷹池からのぐうの音も出ない指摘に無理矢理返そうとしたためか、札菜の言い訳は素っ頓狂だ。

「スーツと一緒に下着まで脱いだら、どこの学校でも退学よ」

僕たちについてきたもののやることのない札菜は近くのロビーチェアで寛いでいる。

剥き出しのお尻はビニールの座面に直乗せ。この二年で少しずつ成長してきた胸の先はふんぞり返り、小さな蕾は天井を向いている。

この痴れ姿は、丁度二年前の今頃、学校の教室で見られているからだろうか。すべての束縛から解放された礼菜は、鷹池から何を言われようが平然としている。

「何なら、人を呼んでもいいんですよ？ あらあら残念、わざわざ大学に編入してきたのに、あつという間にコースケ先輩とお別れですか」

彼女が強気に出られるのは人質がいるからだ。それは、この僕に他ならない。礼菜は自身が脱ぐだけでは飽き足らず、こちらもシャツから下着までひん剥いてしまった。今日は誰もいないため、人が来たら本棚の後ろに隠れて悠々と着替えられる——というのは礼菜の弁。しかし、こんな姿で鷹池と並んで一台のノパソを覗きこむのは……やはり居心地が悪すぎる。隣からの視線が……あまりにも毒々しい。モニタではなく、端末の置かれた机の下ばかりを覗き込んでいる気がする。実際、やたらとタイプミスも多いし。丈が短く、太腿が露わになっているだけに、足の動きがよく見えてしまう。姿勢を直してはモジモジと擦り合わせており、まったく課題に集中できていない。

最初は画面を見ているが、次第にチラチラと下の方を気にしだし、気づけば視線は重く引きつけられている。そんな彼女に礼菜から念押しのお檄が飛んできた。

「鷹池先輩、変なことしないでしょーね!？」

それは絶対にない、と言いたげに、裸の女性が顔を上げる。

「……っんはあっ！ おけおけ、ダイジョーブ！ こっちは私に任せておきたまえつてえ♪」

報告だけすると、こそつと上目遣いで僕を労う。

「輝山ツチも大変だねい。これが恐怖の三角関係ってヤツかい又へへ」

言葉とは裏腹に、彼女の舌つきには遠慮がない。再び僕を啜えると、遠慮なくチュパチュパと唇を窄ませる。

「ん……んああ……♡」

その様子に鷹池はいよいよ我慢ができなくなってきたようだ。こうなってはもう課題どころではない。自分を慰めそうになる両手を抑えるのに精一杯だ。

「あらあら、お顔が真っ赤ですよ？ 服なんて着てなきやお胸もアソコも弄り放題でしように♪」

礼菜からの誘惑に鷹池もいよいよ我慢の限界が来ているらしい。最初は軽く引つ掻きただけだった胸元の手も、今では明らかに先端をつまみ上げる動きに変わっている。

とはいえ、こんな攻防も気づけばもう一時間。多少の飽きは来るようだ。

「あたし、ちよっとお手洗いに行つてきますから、コースケ先輩のことよろしくお願ひしますね」

ここがお外ならその場で放尿でるんですけどねー、などと小言を呟きながら礼菜は席を立つ。

よろしくお願いされた股下の彼女は返事をするために口を離した。

「もいーん。任せてチョー」

しかし……今回は少し様子がおかしい。いつもなら、すぐにでも啜え直そうとするところなのだが。

勃カタ起カくなったところを指でツンツンと突き、ニンマリと笑みを向けるのは、僕ではなく――

「専門ちゃん、欲しいでしょ？」

鷹池への呼び名は、大学に編入しても変わらない。本人も気にしていないようだし、それでいいのだろう。

小声のやり取りが済んだ頃には、礼菜の姿もすっかり見えない。それを確かめると、彼女はすぐに僕を明け渡してしまった。

この施しに――鷹池の瞳は一際輝く！

「おちんぼっ！」

倒れ込むように、僕の股間にむしゃぶりついてきやがった。そして机の下からはモソモソと……これまで奉仕を続けてくれた彼女が這い出てくる。

「やーれやれ。きの子ちゃんも先輩使いが荒いねえ」

きの子、というのは礼菜の渾名だ。埋竹だから、きの子。僕以外の友人は皆そう呼ぶし、僕も付き合い始めるまではそう呼んでいた。

先輩である彼女も、友人の一人である。

「ふひー、もう少し年長者を敬ってくれんもんかのう」

ぐーっと両腕を上げて背伸びをすると、彼女の乳首がくいつと上を向いた。どういうわけか、その肉付きの方はまったくもって芳しくない。そのため、乳房らしい乳房は見られないが、その蕾だけはしっかりと第二次性徴期を経て立派に育っている。

この幼い上半身を活かすために、彼女は下の毛を生やしていない。永久脱毛を施してしまったようだ。ゆえに、割れ目もしっかり露出しているが、やはり肉付きは年相応である。縦筋を生み出す二枚肉はブクリと膨らんでおり、毛はなくとも子供と見紛うことはない。

何より、腰はすらっとくびれ、そこから膨らむ下腹部は柔らかく、フラフラで遊ぶように回されるだけで、その動きに目がいつてしまう。そこから伸びる両足にも無駄な脂肪は付いておらず、タイツで整えずとも綺麗な生足を魅せてくれる。それは、付け根のすつきりしたところを、さらに色っぽく引き立てているようだ。

脇の裏からチラチラとウェーブの掛かった後髪を覗かせている彼女の名は織寺おりでら

春萌<sup>はるも</sup>。大学院の二年生だ。彼女は先輩として以外に、三つの顔を持っている。

一つは、礼菜との露出仲間としての顔。色々あつて僕は一年次の頃から世話になっており、その流れで入学前の礼菜とも引き合わせる事となった。

紆余曲折あつたが、僕と礼菜、そして春萌先輩の三人は、今でもこうして露出プレイに勤しんでいる。だからこそ、礼菜も先輩のことを信用して、こうして僕の局部を預けていたのだが……彼女の顔はこれだけではない。

春萌先輩は、礼菜のいないところでは交わつてはならない、と約束させられていた。しかし、入学前の礼菜がやってくるのは週末のみ。平日の間の禁欲生活に耐え切れなくなつた先輩は……鷹池と結託して、密かに僕の精を搾り取っていたのだ。これが二つ目の顔である。

それで、隣で泣きそうなほど欲情していた鷹池を哀れに思ったのだろう。こうしてこつそり僕の身体をお裾分けしているようだ。……と、他人事のように言っているが、これは僕の身体である。それなのに、本人の意思を無視してこの扱いはどうなのか。とはいえ……礼菜が脱ぎたいと言えば一緒に脱ぐし、鷹池がしゃぶりたいと言うのならその口に我が身を任せてしまう。結局同じと言えそうだ。

先輩も顎が疲れてきたので、僕を貸し出したようだが、ずっと我慢を続けていた鷹池の舐め回し方はいつになく激しい。テーブルの角にぶつけそうな勢いでジュパジュ

パと頭を振っている。

一方、意識してやっているのか無意識かは判らないが、先輩のストレッチは僕の男の部分に刺激が強すぎる。鷹池の舌使いも相まって、僕はついに臨界点を超えそうだ。

「も、もう……射精……っ！」

そんな呻きにも、先輩は飄々としている。

「輝山ツチ射精<sup>で</sup>るってさ。残さず飲<sup>の</sup>精んでね。バレるから」

ビュルクツ！

「むっ、むふふ〜〜♡」

鷹池の口の中で、僕の精液が嘔き射<sup>だ</sup>精してきた。しかし、その勢いに負けないほどの吸い付きで、彼女もまた一滴残らず搾り取ろうとしている。

「むっ、ちゅっ、ちゅ、ちゅ……♪」

美味しそうに啜え込んでいる鷹池の頭の上で、先輩は僕の耳元にそっと囁いた。

(明日の午前中は……お願い。工<sup>、</sup>祐とふたりきりでいさせて)

鷹池は僕を吸い尽くすのに夢中で気付いていない。それで先輩の三つ目の顔がこっそり現れたのだろう。

先輩は礼菜に合わせつつ、鷹池とも合わせつつ、ふたりの知らないところで……僕に恋をしてしまったようだ。勘違いだと思いたいが、本人が言うのだから間違いない。明日の午前中は礼菜も鷹池も健康診断等の用事で埋まっている。その間、身体の空いている僕を専有したいようだ。そのときだけは、普段のハイテンションは鳴りを潜め、限られた男のみぞ知る顔になる。

(工祐……好きっ、好きっ、好きっ、好きい……)

吐息に混ざるような小声で、僕の名と想いをキスに込めていた。唇だけでなく、頬から鼻先まで顔という顔に、彼女は愛を刻んでいく。

一方、下半身に食らいつくのは鷹池による熱烈な愛撫。

「んっ、んふう……ちゅむう……んくくく♥♥♥」

本当に嬉しそうで、すぐ上の方で嵐のような口付けが行われているとは思ってもよらない。上と下とで盛大に愛され尽くしたところで……ザー、と遠くから水を流す音が聞こえてきた。

「ホイホイ専門ちゃん、ごちそうさまでした？」

「うん……とっても生き返った気分……♥」

酔いの回った目つきで口周りを舐めずっているので、正気に返らせるために軽く頬をぺちぺち叩く。こんな顔を見られたら一発でバレかねない。

「……あ、ええ。大丈夫よ」

その間に、先輩も再び定位置に戻っている。間接キスなどモノともせず、鷹池の中で射精したばかりで弱ったところをすっぽりと温かな口で包み込んでしまう。

そこに、手の水をヒラヒラと弾きながら礼菜が戻ってきた。

「……アラ、まだ服着てたんです？ そろそろ耐えきれなくなってくる頃だと思ってたんですけど」

「貴女と一緒にしないで。私に外で裸になる趣味なんてないんだから」

実際、彼女に別段露出趣味はない。ただ単純に、裸になって僕と抱き合うのが好きなかだけであり、その場が外になってしまうことが多いだけだ。また、先輩も先輩で、礼菜に付き合いつつも、彼女は命令されるのが好きなだけであり、自分から好んで裸になることはない。

つまるところ、この中で生粋の露出狂は礼菜だけなのだが……傍から見ればその手の人間の集まりに見えるんだろうな、コレは。

一度精液を味わったからか、そこからはサクサクと作業は進んでいく。礼菜が僕に抱きつき、向い合って膝に乗り、熱り立ったところを挿入しこんでも、なお断固として課題の手を止めなかった。

「きの子、あまり揺らさないで。見難いわ」

「で、でもっ、もうすぐ……っ、はうっ、はうう、はううう……っ」

ピクピク腰を震わせる礼菜の背を、僕は抱いていない。一応鷹池を手伝うことが最優先なので、礼菜にひつつかれながらも一応キーは叩いていた。

が、やはり無理な姿勢である。同様に、鷹池にとつても。

「今日はこのくらいにしましょうか。これ以上は、もう……」

手は止めなかったが、鷹池の頬は触れたら火傷しそうなほど熱を放っている。何しろ隣で性行為が行われていたのだ。気が気でなくなってきたのだろう。

「はうう……コースケ先輩の愛情が……っばい注がれてますう♥ 服を着てる人は可哀想ですねえ？ 織寺先輩もそう思いませんか？」

鷹池と違って裸になっていた春萌先輩は、僕と礼菜の行為を遠慮なくオカズにしていたようだ。

「フへ……フへ……気持ち良かったよお……♪」

彼女も彼女で絶頂<sup>イッ</sup>していたようだ。そして僕も、礼菜の言うとおりに、膣<sup>なか</sup>内で精を絞り出している。

この異様な空間で、唯一正気を保っている鷹池が損をしている形だ。それもそれで、何だか居た堪れない。

「今日も助かったわ。また別の機会にお願いね」

いつもならこの後第二の課題が始まるものだが、今日は礼菜がいる。いや、明日も、明後日もいるのだろう。彼女の入学により動きにくくなったが、これで諦めたとは思えない。きつと、新たな手を打ってくるはずだ。

全裸で愛しあう僕と礼菜を目に映さないよう鷹池は淡々と片付けを進めていく。対して礼菜は見せつけるように唇を交え、チラチラと横目で様子を窺っていたが……  
「面白くないです！」

鷹池がすべての荷物を鞆にしまい終えたところで、礼菜は唐突に僕から立ち上がった。

「……何がよ」

言われた方も、訝しげに眉をひそめている。当然だ。どう考えても、隣でイチャつかれている方が面白くない。

それでも、礼菜は酷く立腹している。ついさっきまで僕の膝の上であんなに楽しそうにひつついていたのに。何をそんなに怒っているのだろうか。

「よくぼーに負けて裸で謝れば許してあげましょうかねー？ ……とも思ってたのに！ 何ですか、その態度は！」

「許す？」

鷹池は素知らぬ顔をしている。僕には思い当たる節しかないのだが……次の指示で、それは確定的なものとなった。

「今すぐそこに正座してください！ ……コースケ先輩もですよ」

ふたりに対して怒っているとすれば、それは鷹池と交わされていた「約束」以外にあり得ない。

僕が大人しく床に膝を突いたことで、鷹池もまた僕の隣で足を揃える。何やら只事らしからぬ空気を感じて、春萌先輩は礼菜の背後の長椅子にちよこんと座り直した。こちらから見えるその顔は、何ともソワソワしている。彼女もまた、礼菜との約束を破っているのだから。

それに引き換え……鷹池のすまし顔は大したものである。面と向かって、よくもここまで堂々と振る舞えたものだ。

「こーちゃん一人にこんなことさせるわけにもいかなから合わせたけど……一体何なの？ 私、貴女に謝らなきゃならないようなことした覚えはないんだけど」

鷹池はこの段になってもまだ白を切り通すつもりらしい。しかし、僕は下を向くばかりだ。後ろめたい気持ちもあるのだが……何しろ、目の前には屹立している礼菜の股間が茂っている。そんなものを魅せつけられては、もう説教どころではない。

こんな対照的な僕たちに向けて、礼菜はハッキリと断言する。

「ほう、浮気や寝取りが謝る必要のないこと、ですか」

やっぱりか！ 礼菜には申し訳ないと思ひながらも……僕は鷹池との「約束」を毎日のように続けてきている。

「約束」——それは、鷹池裸足に僕の子を身籠らせること。病的なまでに僕の子を産みたがる彼女の誘惑に負け、僕は本気で妊娠はらませるべく、日々膣内射精なかだしを繰り返してきた。

鷹池は何の痕跡も残していない自信があるのだろうが、彼女とて完璧ではない。何より、頻度がマズすぎた。通学中ほぼ毎日抱き合っていたのだから、どこかに綻びがあっても不思議はない。

それでも、顔色一つ誤魔化せそうにない僕と異なり、鷹池は未だ冷静そのものだ。「酷い言いがかりね。何か証拠でもあるの？」

これに対して、礼菜はついに伝家の宝刀を抜こうとするも——

「証拠？ いるんですか、そんなの？」

それはとんでもないナマクラだった。

「……ハア、もう帰る——」

「動かないで下さい！」

その一言に、むしろ背後の春萌先輩の方がビクリと身を竦ませる。溜息を吐きなが

ら片膝立ちになっていた鷹池だが、その雰囲気に押されて再び足を戻した。

礼菜はドスンと腰をおろして胡座を搔くと、自分の両膝にパンつと両手を突っ張る。頑固親父のような仕草だが、相手は裸の女のコだ。ここで僕が顔を上げれば、今度は柔らかな毛の塊だけでなく、丸みを帯びた二つの脂肪の方まで見えてしまう。こんな  
の……可愛すぎるだろ……！

どうやって威厳の欠片も出せないまま、礼菜の説教は続いていく。

「まー……強いて言えば状況証拠、つてやつですかね？」

つまり、僕の怯え方から察している、ということか。しかし、そうと判っていても、僕には鷹池のように振る舞うことなどできようもない。

「ああ、こーちゃん。一緒にご飯食べに行くのなんて浮気のうちに入らないから安心していいわよ。こーちゃんは女のコに弱いから、こうやって強気に出られたら流されるのも無理ないわね」

恋人から怒鳴られて、感じる必要のない罪に苛まれている——鷹池はその方向で話の軸をズラそうとするが、それこそ礼菜の思う壺だった。

「なんだ、鷹池先輩も解ってるんじゃないですか」

礼菜は決着を付けるべく鷹池の眼前にグイと顔を寄せる。

「あのですねー……長年想い焦がれていた男の口にフラれたものの、彼は彼女と引き

離され、自分は彼と同じ敷地に通学……こんな状況なら、徹底的に避けるか、徹底的に手を出すか二つに一つしかありません」

そして、鷹池が僕と仲睦まじく接していたことから、『徹底的に手を出した』と判断したようだ。

「それは貴女の思い込み——」

「しかも、相手は女の、コに弱くて流されやすいとくれば、イタズラし放題じゃないですか」

鷹池の言葉を遮り、僕に対して冷酷な評価を下す。当たっているだけに……悔しいけれど何も言えない。

「……とはいえ、あたしにも落ち度はあります。こんなセフレがいたのに気づかなかつたんですから。平日丸々使って……イチャイチャしてましたよね、絶対！」

そうは言うが、礼菜と過ごす休日は授業のある平日とは比べ物にならないほど濃密に過ごしてきた。愛情を一番深く注いできたのは、礼菜を置いて他にいない。

そしてそれは、彼女にもちゃんと伝わっていたようだ。

「コースケ先輩はいつだって優しく……あたしのために何でもしてくれて……だから、完全に油断してました」

諦めるように溜息を吐くと——ゴッ！

「ったあ!？」

腹いせの頭突きに鷹池が呻く。が、礼菜はそのままスクリと立ち上がった。

「今夜、あたしとコースケ先輩、それと織寺先輩との三人でお花見する予定なんですよ」

「ふうん……?？」

これまでまったく知らされてこなかった鷹池は、あからさまに不満を露わにする。

「うちの裏山に桜の木が生えてるところがありますよ。午前一時から始めます。場所は地図アプリで送れば分かりますよね?？」

「あら、私も誘ってくれるのカシラ?？」

どういう風の吹き回しかと思えば、そこにはとんでもない付帯条件が盛り込まれた。

「用意はこっちでしとくんで、何も持ってこなくていいですよ。食べ物とか飲み物とか……シャツとかパンツとか……あ、靴だけは履いてきてもいいですよ」

常識的に聞けば一部に冗談が含まれているが、僕らの格好がそれを笑い飛ばすことを許さない。

「はあ!? 全裸で、って……!？」

僕と鷹池の家は歩けば二〇分はかかる。そこを女の一人に裸で歩かせるなんて無茶苦茶だ!

花見に参加する条件としては重すぎる。それは誰の目にも明らかだからこそ……どうやらそれが彼女らの妥協点だったようだ。

「……分かったわよ。そのくらいならお花見の余興に丁度いいわ」

「そうです。お花見ごときのためです」

礼菜は鷹池を欲望の下に服従させたかった。そのために、すぐ隣でこれ見よがしに愛し続けていたのだろう。我慢しきれなくなつて、自分から仲間に入れて欲しいと懇願させるために。これまでのことを正直に白状して全面的に謝罪すれば、彼女はこの場で僕の身体を貸し出していたかもしれない。

だが、鷹池は断固としてそれを拒絶した。あの一、杯を飲<sup>の</sup>精めたことも大きかったかもしれないけれど。ずっと性の充足を求めながらも、礼菜の前に屈することはなかった。

そんな二人の間を取り持つ『言い訳』が『花見』なのである。

礼菜はこれまで二年も浮気を続けられていたにも関わらず、それに気づけなかった。ゆえに、相応の詫びを入れれば水に流すつもりでいる。それが、全裸行脚という羞恥プレイだ。

しかし、それを直接突き付けても、決して鷹池は飲まない。ゆえに、言い訳を用意した。それが花見である。常識的に考えて、そんなことのために素っ裸で出歩くなど

あり得ない。だが、鷹池の中では辛うじて自尊心を保つことができる。自分は非を認めただけではなく、花見に出席するための悪ふざけである、と。

つまり、鷹池が名を取り、礼菜が実を取った、といったところか。

「それでは、スマホもないでしょうから道を間違えないよう気をつけて下さいね。あと、服を着て出て直前で脱ぐなんてセコイ真似をしたら……」

「しないわよ。この程度のことで馬鹿馬鹿しい」

鷹池からすれば、全裸夜行は花見と吊り合う程度の軽さで扱わなくてはならない。礼菜の手前ということもあるだろう。今はこうして強気を保っているようだが……その皮が剥がれたときどうなるか。そんな内面をよく知るだけに、僕の心配は募ってゆく。

しかし……僕には桜の木の下で彼女を待つことしかできない。裸足の無事を祈りながら。

\*\*\*

深夜〇時半、裸足はアパートの陰から表のバス通りの様子を窺っている。そして、ひよいと躍り出たその姿は……間違いない肌色一色だった。何故そのようなことが判

るか、といえは……実際に見ているからである。

「ふむ、ここから素っ裸なら……ま、問題ないですね」

裸足は胸部を両腕で隠し、キョロキョロと外を見回しているが……まさか、似たような格好をしている男女から見られているとは思ってもいないだろう。しかも、暗視カメラまで持ち出して。肉眼の外から監視しているのだから、本人には気づきようもない。

こんな覗き魔のような所業は感心できないが……条件を出した以上、きちんと見届ける義務がある、と言われれば理には適っている。が、監視員まで揃って裸になつては、その責務に支障を来すのではなからうか。極めて難のある状況ではあるが、裸の恋人から請われれば、僕もまた脱がざるをえない。

礼菜は裸足が約束に従っていることを確認すると、カメラを僕へと手渡した。それ以上見る必要はないと判断したようだ。

レンズの向こう側から裸足は大切なモノを守るように身体をしっかりと抱えて、全力で走ってくる……が、パッと駐車場へと入ってしまった。そしてしばらくすると、先ほどと同じように顔だけ出して辺りを覗き……そしてダッシュ。礼菜のように楽しむ余裕はなく、目的を遂行するためだけの潜入捜査のようだ。

裸足と僕の家を最短の道のりで結ぶなら、この県道を辿るのが最も短い。が、ここ

は二車線の道路で、いつ車が通りすぎてもおかしくない雰囲気がある。それに耐えかねて彼女は脇道へと入ってしまった。大通りの先で待ち構えていた僕たちでは、どうなっているかわからない。

「礼菜……どうする？」

問われた彼女は何の機器も使わず、静かに周囲の気配を探っているようだ。そして……クスリと意地悪そうな笑みを浮かべる。

「すぐに戻ってきますよ。やれやれ……間抜けな女ですねえ」

彼女がそう言うのなら、ここで待っていれば良いのだろう。僕は裸足が入っていった角をじっと見守る。すると、礼菜の予測通り、彼女はパッと走り出てきた。しかし、これまでずっと胸に当てていた両手が、今は顔の方に、いや、目元に……

「……泣いてるのか……？」

何があったのか、と不安になって、僕は思わず彼女に釘付けになる。が、そんな僕の肩を礼菜はトントンと叩いた。

「先輩、隠れないとあたしたちも泣くことになりますよ」

ここは、見通しは良いものの、隠れられる場所は豊富にある。一先ず僕たちは謎事務所の植木の後ろ側に身を潜ませることにした。

「鷹池……何があったんだ……」

自分の身の危機も忘れて、僕は彼女の身を案ずる。

「あの先に公園がありましたよね。その辺りに動く気配が四つか五つほど感じました。近所の学生が夜通しで騒いでたんでしよう。でも——」

ここで、ヘッドライトが軽い走行音と共に僕たちの裏手を走り過ぎてゆく。

「……でも、鷹池先輩が追われた様子はありません。多分、見られたと勘違いしてビビってるんですよ。だから、ほら……」

彼女が車の去った先を指すので、僕は再び道路に出て裸足の様子を確認しようとする。が、そこには誰もいない。裸足は……どこに？

「鷹池先輩なら、多分、あのアパートの辺りにいるみたいですから、その陰で塞ぎこんでるんですよ。バレたかもしれない、つてところで車との遭遇。これは……心が折れたかもしれないね〜♪」

彼女はこのカメラを使っていない。それなのに、僕以上に周囲の状況を正確に把握している。これが、彼女の才能であり、彼女が安全に野外露出を楽しめる秘密だ。

『外で裸になっているうちに、辺りの気配が判るようになったんです♥』

裸足の動きはもちろん、その先に人がいるとか、車が来るとか、そんなことまで礼菜には判ってしまう。もちろん、人を消したり自在に動かしたりはできないので限界はある。とはいえ、こうして静まり返った夜ならば全裸散歩どころか、それ以上のこ

とすら何度も繰り返してきた。

しかし、裸足にそのような能力はない。いっどこから誰が出てくるか……今もビクビク怯えているのだろう。そんな彼女に対して、礼菜の態度は些か冷たいのではないか。

「礼菜……もう酷くすることもないだろ。この辺で迎えに——」

カメラから目を離し、礼菜の説得を試みようとするが、彼女がポンポンと僕の腕を叩く。出発のサインのようだ。

「冗談を本気にしないで下さい。鷹池先輩がこの程度のことですと挫けると思ってるんですか？」

礼菜は冗談のつもりかもしれないが、この状況は冗談では済まされないぞ!!

「鷹池には礼菜のようにはいかないんだ。このままだと——」

裸足の暴挙を止めようと、僕は来た道を引き返そうとする。

だが。

「……そんなこと、聞いてませんよ」

溜め息を吐きながら指を差されても、肉眼では見通せない。だから、カメラの画面を覗き込むと、そこにはフラフラとこちらに歩み寄る裸足の姿があった。もう身体を隠す気力もなく、目元をゴシゴシと拭っている。が、そこに周囲に怯える心細さはな

い。逆に、ある意味堂々としている。

「このタイミングであたしたちが出て行ったら、それこそショックですよ。ま、ここからはやんわりと先行していきましょ」

礼菜に言われて、僕は距離を取りながら後続を見守り続けている。まるで、始めてのおつかいに奮闘する我が子を心配する親のようだ。

しかし、礼菜が言うとおりに、もう裸足は何に怯える様子もない。冷静になれば、ライトを照らして近づいてくる車両は夜道では逆にすぐ判る。礼菜でなくとも気づくことは容易い。僕たちより少し遅れてしつかり道端で身体を隠している。

そしてようやく僕が済むアパートに辿り着いた頃……さっき礼菜の言葉の意味がようやくよく解った。

「……鷹池が、ゴミ捨て場で……？」

明日は収集日ではないので、そこは綺麗に片付けられている。道路に面した一角に彼女は膝を突いた。そして清掃用の蛇口を捻るとバシャバシャと水浴びを……いや、顔を洗っているのか。何のために……？ と考えるまでもなく、その目的はそれほど多くない。

「あたしに泣いてたことを気づかれたくないんですよ。意地っ張りですからね、あの人」

彼女が僕に向けて手を差し出す。何かを渡せといつているようだが……僕を持ち物はこれしかない。

ここまでの一部始終を保存していた録画データを、礼菜はこの場で削除した。

「コースケ先輩への想い一つで……何があってもやり切るとは思ってたけど、まさか泣くほどとは」

礼菜も礼菜なりに裸足に対して敬服しているらしい。

「あんな女を無理矢理押し留めても、逆に何をされるか解ったもんじゃありませんね」  
つまり、それは……！

もう裸足を監視する必要はない。彼女に追いつかれてすべてが水の泡になる前に、僕たちは小走りに春萌先輩の待つ桜の木の下に急ぐことにした。

素知らぬ顔で、最後の来賓を迎えるために。

露出少女と痴女の  
モラルなき戦い!

# 裸族忍者シリーズ

いつでもどこでも脱ぎたがる  
露出少女・埋竹礼菜  
大好きな男と子供を成すことに  
人生を懸けて迫ってくる痴女・鷹池。  
そんな三人に翻弄され続ける  
流され男子の痴情まみれの官能ライトノベル!



詳しくはWebで

<http://soekiba.net/ninja/>



sorega kanojo no

未知なる世界で  
どう生き延びる...?

それが彼女の

生存戦略!

seizon senryaku

エッチな  
番外編的短編集  
『それが彼女の  
性交戦略!』も  
こっそり公開中!?

学校が異世界に飛ばされた!?  
それでも見知らぬ大地の上で  
誰もが遅く生き延びてゆく。  
ある者は『力』で、  
ある者は『智』で、  
ある者は『心』で、  
ある者は『愛』で。  
そして……  
彼女たちは元の日常に  
帰ることができるのだろうか……!?

詳しくはWebで

<http://soekiba.net/4girls/>

オンナ  
たぎる♀に

おびえる♂  
オトコ

乳を出そうが、尻を出そうが、  
女の身体は贅肉扱い。  
一方、成人向けコーナーには  
半裸の男優ポルノがズラリ——  
女が迫り、男があしらう、  
そんな世界があったとしたら……？  
価値観・身体づくり・社会システムに至るまで  
真面目に考えてみた物語です。

リビド〜  
男女の性衝動が反転した社会とは  
リバ〜サル

詳しくはWebで

<http://soekiba.net/rev/>

# ア ス ト ラ ル ツ イ ン ズ

兄は指揮官に 妹は銃殺刑に

新政府軍の警備兵である兄と  
旧政府軍の首謀者である妹。  
ふたりの自己都合が交錯する  
陰謀豊かなお手軽コメディ!?

テロリスト  
迫り来る**反逆者**  
プリンセス  
担がれる**民間人**  
そして...  
アホの子  
**掻き乱す問題児!**

妹**vs**王女様  
お兄ちゃん争奪戦  
**勃発!?**

から  
**アストラ!?**

妹はお風呂嫌いで  
王女は珈琲竹が好き

DOJIN  
**R18**  
成人向け  
18歳未満の  
購入・閲覧禁止

アストラルツインズ  
後日談の**R-18**短編集!

詳しくはWebで  
<http://soekiba.net/astra/>

正義の投与の行く末は  
いじめられっ子の処方箋

添牙いろは

イジメ撲滅運動——

とある高校で突如始まったこの騒動に  
埋竹雛菊は意図せず巻き込まれていく。

しかし……

そもそも、イジメとは何なのか？

そんな疑問に突き当たる。

悩み抜いた末に、辿り着いた結論とは……？

そして、運動を取り仕切る

学級委員・あまゆみ雨弓来禾の真の目的とは……？

イジメと向き合うすべての人に送る一冊です。

詳しくはWebで

<http://soekiba.net/presc/>



# 空色書房

Sleeping under the sky



ナンだカンだと色々ありましたが、  
ついに本命・生粋の露出狂であり、恋人でもある  
埋竹礼菜のご入学！

ところが……

彼氏・輝山は二人の女子大生に喰われ放題の犯され放題。

それを知り、彼女が下した決断は——

阿部悠真と春萌先輩の冷めきった関係、  
そして、輝山との因縁にもついに決着！